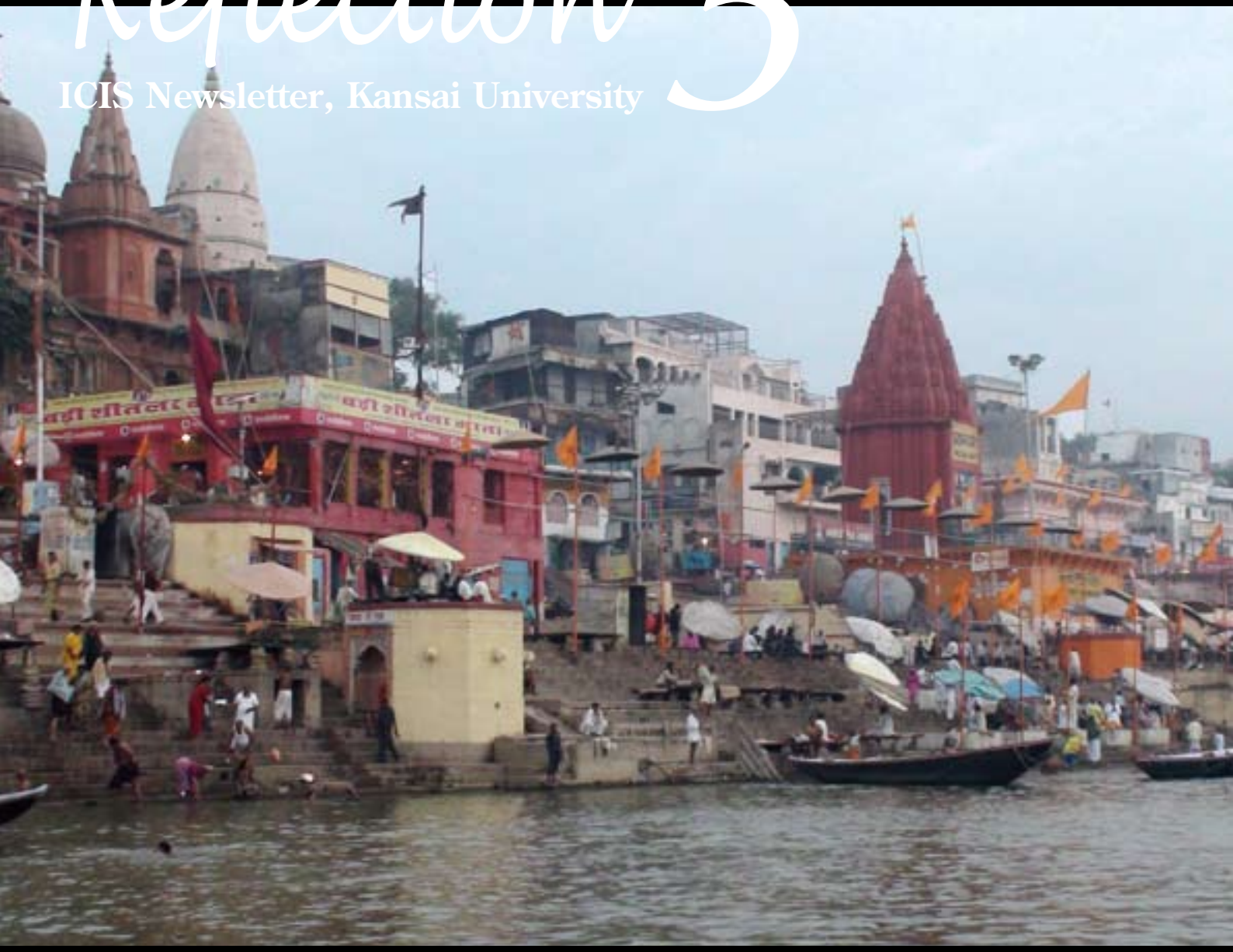
Reflection 5

ICIS Newsletter, Kansai University



Contents

東アジア文化交渉学会創立総会・第１回年次大会
多元文化交渉への新しいアプローチ …… 2
コラム／世界遺産は誰のもの
－歴史と解釈の共有へのこころみ－ …… 5
ICIS周縁プロジェクト　第二回
ヴェトナム・フエ旧外港集落の
フィールド研究スクール …… 6
活動報告（1）：ICIS共催シンポジウム等 …… 8
連載コラム／食の文化交渉学　第四回 …… 11
活動報告（2） …… 12
お知らせ・出版物紹介 …… 13
紀要募集要項・編集後記 …… 15

ICIS
文部科学省グローバルCOEプログラム
関西大学文化交渉学教育研究拠点
Institute for Cultural Interaction Studies, Kansai University

東アジア文化交渉学会創立総会

第１回年次大会

多元文化交渉への新しいアプローチ

2009年６月27日（土）、関西大学100周年記念会館において、東アジア文化交渉学会（SCIEA）の創立総会及び第１回年次大会が、参加者150名に及ぶ大盛況のうちに開催された。

午前の部の創立総会では、学会の規約と運営に関する議題が提案され、満場一致で承認を受けた後、初代会長の陶徳民（関西大学ICISリーダー）氏により学会設立が宣言された。平野健一郎（東京大学・名誉教授）、土田健次郎（早稲田大学・副総長）、小島毅（東京大学・准教授）、鄭培凱（香港城市大学中国文化中心・主任）、崔官（高麗大学校日本研究センター・所長）、グェン・ツァオ・ファン（ヴェトナム国家大学科学技術学院・院長）、ルドルフ・G・ワグナー（ハイデルベルク大学中国学研究所・教授）各氏の祝辞に続き、青木保（文化庁長官［当時］／大阪大学・名誉教授）氏の記念講演が行われた。次いで、黄俊傑（国立台湾大学人文社会高等研究院・院長）、朱英（華中師範大学中国近代史研究所・所長）両氏が、2010年度と2011年度の年次大会の開催予定について紹介した。

記念写真撮影、ハーバード燕京図書館・関西大学図書館との学術交流協定調印式、入江昭（ハーバード大学・名誉教授）、マーティン・コルカット（プリンストン大学・教授）両氏に対する名誉博士号授与式の後、午後の部の第１回年次大会では、黄俊傑氏による基調講演が行われ、馬小鶴（ハーバード燕京図書館・中文部研究館員兼主任）、陶徳民両氏から図書館紹介があった。続いて、５つの分科会において各５名の研究者による報告がなされ、各２名のコメンテーターを交えて白熱した討議が交わされた。

記念講演、基調講演および各分科会における報告については、それぞれ下記のとおりである。

東アジアという地域概念は一見自明のようだが、現代世界においてはその有効性を含めて問い直されるべき概念である。国家単位でまとまっているように見える東アジア各国の文化も、実はそれぞれ多民族性・多文化性を

内包している。今後の東アジアを巡る議論は経済偏重ではなく、こうした文化的多様性から論じていく必要がある。また、その多様性の割に深刻な文化衝突が見られないということが東アジアのもう一つの特徴である。東アジアでは歴史の中で絶えず文化交流が繰り返され、「ソフトパワー」「スマートパワー」として外交においても大きな役割を果たしうる。東アジア文化圏というとよく儒教文化圏や漢字文化圏が取り上げられるが、儒教や漢字は現代では必ずしも共通の文化的紐帯とはなり得ない。ただし、音楽や映画、マンガなどに見られる東アジア規模での交流や協力は近年ますます盛んになっており、その意味で「現代東アジア文化圏」はまさに構築されつつある。そのような時代にあって、大学の果たすべき役割はますます重要になっており、東アジアの人材を育成する新たな体制の再編が急務と考える。このような文化のあり方は国際的公共性を持つものであり、安全保障、平和実現の観点からもさらなる発展が求められる。

記念講演

現代東アジア文化圏の形成と学術文化交流

青木保（文化庁長官／大阪大学・名誉教授）

基調講演

リージョナル・ヒストリーとしての東アジア文化交渉史
―問題意識と研究テーマ

黄俊傑（国立台湾大学人文社会高等研究院・院長）

20世紀に歴史研究の主流をなしたナショナル・ヒストリーと、21世紀以降急速に関心が高まったグローバル・ヒストリーとの間に位置するリージョナル・ヒストリーは、注目すべき新たな学問分野である。その研究手法を東アジア文化交渉史研究に適用するに際しては、1）関心の焦点を文化交渉の結果からその過程へと移行させること、すなわち既成概念の転換が求められる。また、2）リージョナル・ヒストリーは、個々のナショナル・ヒストリーを相互に結びつけ、さらにグローバル・ヒストリーを構成するものでなければならない。さらに、3）ある文化の概念や価値が他文化のコンテクストの中で新たに解釈されること、すなわちコンテクスチュアル・ターンの問題についても注意を払う必要がある。以上を踏まえ、東アジア文化交渉史研究における問題として、1）自己と他者との相互作用、そして、2）文化交渉と権力構造との相互作用とを提起する。また具体的テーマとしては、1）人物の交流と、2）物品、とりわけ書籍の交流、および、3）思想の交流を挙げることができる。東アジアの発展とグローバル化の加速に伴い、人文社会科学研究はナショナリズムの枠組から脱却しつつある。リージョナル・ヒストリーとしての東アジア文化交渉史研究とは、自らの伝統文化に立ち返り、それを再び考え直すことなのである。

分科会（ラウンドテーブル）

１文化交渉学としての言語文学研究の可能性

内田慶市氏の司会のもと、フェデリコ・マシーニ、張西平、木津祐子、金文京、崔溶澈各氏からの報告が行われ、東アジア漢字文化圏の中心である中国と西洋、日本、朝鮮半島などの周縁地域における言語接触に関する考察、周縁地域において受容された言語文学の形式および内容に関する考察、周縁地域において受容された言語の比較検討がなされた。コメンテーターの周振鶴、竹越孝両氏を交えた討論では、周縁地域で受容された言語間の共通性および相違性への着目は、新たな可能性を有するアプローチ方法であり、今後の文化交渉学としての言語文化研究において、中心と周縁の関係のみにとどまらず、周縁に属する文化間の多元的な交渉についても注目していく必要があるとの認識が得られた。

２文化交渉学としての歴史研究の可能性

陶徳民氏の司会のもと、文化交渉学の視点に基づく歴史研究によって、いかなる新生面が開かれるかという課題をめぐって発表・議論が行なわれた。松浦章氏は江戸時代における中国産砂糖の輸入と国内消費を分析した。葛兆光氏はJ・K・フェアバンクの「衝撃―反応」説の意義に対する再考をはじめ、三つの重要な問題を提起した。黄一農氏は、明清交替期における鄭氏一族が使用した中国製西洋大砲について論じた。杜栄佳氏は19世紀後半に渡米した中国と日本の知識人を挙げ、新しい視野での文化交渉研究の必要性を強調した。コメンテーターの中見立夫氏は、文化交流研究史のトレンドが文化摩擦の問題から文化共存の問題に移り変わる中で、そこで中心となるフィロソフィーについて考えるべきことを提言した。また、王汎森・入江昭・馬小鶴各氏からもコメントがあった。

３文化交渉学としての思想宗教研究の可能性

吾妻重二氏の司会のもと、文化交渉学の視点からの思想・宗教研究へのアプローチが模索され、それに伴う課題が明らかにされた。ルドルフ・G・ワグナー氏は康有為を例に、近代西欧思想が中国に与えた影響を論じた。河宇鳳氏は「東アジア史」叙述に向けた比較史的研究の必要性を訴えた。堀池信夫氏は明末清初のイスラム哲学者王岱輿の思想を紹介した。張哲源氏は韓国における朝鮮思想史・宗教史研究の動向と課題を紹介した。李焯然氏は明末の外来宗教の流入と儒仏道三教との交渉をテーマに、思想文化交流の諸相を述べた。コメンテーターの金泰昌氏は、文化交渉学の独自性を同時に多文化を意識する視座に求めるべきこと、同じく澤井啓一氏は、文化交渉の当事者である二国あるいは多国間の力関係の非対等性を意識すべきことを指摘した。

４文化交渉学のフィールドとしての周縁

藤田高夫氏の司会のもと、「周縁」をキーワードに設定して報告と討論が進められた。グェン・ツァオ・ファン氏はヴェトナムの都市形成に関して、野間晴雄氏は東南アジアというフィールドから、小田淑子氏は宗教から周縁を論じる際の方法論を述べた。また熊野建氏はフィリピンのイフガオ社会から、井上充幸氏はカラホトという場を通して周縁を論じた。コメンテーターの伊東利勝、陸延両氏からは、文化交渉学における周縁からのアプローチを深化させていく上で、「周縁―中心」および「文化」という概念を再検討すべきことが指摘され、それらを止揚して新たな視座の創出を目指すべきことが、参加者相互の共通理解として改めて確認された。

５文化交渉学としての日本文化研究の可能性

原田正俊氏の司会のもと、翻訳を一つの論点として報告と討論が行われた。町泉寿郎氏は海外における日本語学習（漢文訓読）の実践経験を示し、ウイリー・ヴァンドゥワラ氏は他者（中国）文化を理解するための日本的な方法である漢文訓読の文化史的意義を論じた。ケイト・ウィルドマン・ナカイ氏は『モニュメンタ・ニポニカ』の編集経験から、研究論文の翻訳の難しさを説いた。崔官氏は日本文化研究の方法を論じ、文化交渉学の意味を考えた。王敏氏は戦前の留学生黄瀛の事例を挙げ、近代教育における文化交渉を示した。コメンテーターの厳紹璗、辻本雅史両氏を交えた討論では、日本文化研究の方法が再検討され、文化交渉学の手法の可能性が示唆されるとともに、技術的な難しさが問われる内容となった。

世界遺産は誰のもの
―歴史と解釈の共有へのこころみ―

篠原啓方（文化交渉学教育研究拠点・特別研究員）

2008年８月、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で、国際高麗学会主催の国際会議が行われた。同学会は1990年の創立以来、韓国・朝鮮学研究の国際的進展と、韓国・共和国（北朝鮮）の研究者の交流促進に尽力してきた。

テーマは「高句麗史」。高句麗とは、中国東北部～朝鮮半島中部までを領域支配していた東北アジアの古代国家だが、その歴史の解釈をめぐって2000年以降、中国と韓国の対立が目立つようになった。その焦点は「高句麗史は中国史か、それとも韓国・朝鮮史か」にある。

中国の研究者（無論すべてではない）が中国の地方政権だとする根拠は、高句麗が貢物を持参して臣下と称し、中国がそれを認めた点にある。この解釈にもとづき、７世紀に起こった隋唐と高句麗の戦いは内戦であって対外侵略ではない、と説明する。「高句麗は中国史」とは「高句麗は朝鮮史」を否定する表現ではないが、近年「朝鮮史ではない」という主張が散見されるようになった。当然ながら、韓国・共和国側が反発した。日本にも「中国史の専攻」を自称する高句麗史研究者はほとんどいないであろう。だがこうした近代歴史学における朝鮮史（満鮮史）の枠組もまた、日本の侵略史観の産物だったと批判する。

こうした解釈の相違は学術論争にとどまらない。2003年、故・平山郁夫画伯の助力を得て共和国が高句麗の壁画古墳を世界遺産に登録しようとしたが、中国の反対によって挫折し、翌年の中朝同時登録によって決着をみた。朝鮮史として登録されては困る、というわけである。

「中国が高句麗史の所有権を主張する目的は、共和国に対する政治的影響力の強化にあるため、学術レベルの解決など無理である。半島が統一されれば、この問題は解消するだろう」。

【高句麗史の象徴ともいえる広開土王碑（6.39m）。文化遺産登録後、ガラス張りの碑閣に収まった。】

【2001年夏。韓国人団体が訪れた瞬間、撮影を制止された。両国の歴史解釈が対立をはじめた頃である。】

最終日、イタリア人研究者のこの露骨な中国批判に対し、中国側は「傲慢で無知」と反論し、主催者も報告の不適切性を指摘した。共和国の研究者が唯一、それぞれの立場を理解し、擁護していたのは印象的だった。

一国史観の克服が唱えられて久しい。だが自国内から相手側の視点を想像したところで、所詮は自己満足に過ぎない。私は韓国で長期留学し、先輩・後輩として接するなかで、「心」の境界が歴史の解釈をも束縛していることに気づかされた。中国東北地域や共和国の研究者が、国外で外国の研究者と語りあえる機会は今なお限られている。戦後の日本には、政治的状況から中国や朝鮮に行けない、もしくは行かない研究者の世代が存在し、その研究が彼の地で歴史や民族を受け継いできた人々への理解と切り離されていた点があったことは否定できない。歴史資料を解釈するのは今を生きる人間であり、人の越境と交流なくして、相互理解などなしえるはずもない。歴史研究としての東アジア文化交渉学は、その先駆とならねばならないだろう。

晩餐では、午前の緊張などなかったかのように、英語、韓国・朝鮮語、中国語、そして日本語が入り乱れて盛り上がった。研究を知り、顔を知り、為人を知る。ともに杯を交わし、歌を歌えばなおよい。東アジア史の共有を目指すこうした試みが今後も続けられるべきことを確信するとともに「研究者の距離は、歴史解釈の距離を埋められる」という幻想を信じてもよいと感じたひとときであった。

ICIS周縁プロジェクト　第二回

ヴェトナム・フエ旧外港集落のフィールド研究スクール

文化交渉学としてのフィールド研究を目指すため、2008年度（ニュースレター第3号参照）に引き続き、フエ都城域の外港として機能したフオン河沿い集落（タインハー、ミンフォン、ディアリン、バオヴィン）の調査を８月27日から９月13日にかけて行った。本年度は日本側だけでも12名の大学院生（D2・D1・M2）、６名の若手研究者に、教員側（野間晴雄教授、熊野建教授と西村昌也COE助教）３名という大きな調査団となった。国際シンポジウム２日を挟むという強行日程で、大雨・増水に巻き込まれ（**写真１**）、ボートで調査地を脱出する日もあったが、参加者の着実な活動とヴェトナム側の熱心な協力により、濃密な調査研究の時間を過ごすことができた。

【写真１】

調査は昨年同様、人類学的テーマを主眼とした聞き取り調査班、文書や文字情報、さらには氏族の祭祀資料を集めることを目的とした文献収集班、集落の地理的範囲や構造を把握することを目的とした地理情報収集班を主軸とし、墓地や墓碑資料の収集班、さらには院生独自の調査班として、商区バオヴィンでの生業や移住に関する聞き取り調査班を新たに設けた。授業としての調査はわずかに５日間のみであったが、全員が各班の調査や資料整理をそれぞれ体験できるよう配慮した。

【写真２】

学術的には、ディアリンやバオヴィンでの各種手工業専業者（**写真２**）や商家（**写真３**）の由来や移住の様相、バオヴィン集落での居住者の階層的来住構造や空間的分布構造、商品流通、関帝廟や天后宮の信仰の実態などがかなり明らかとなり、集落と外とのつながり、集落や信仰サークルの内部構造等に関しても具体的理解が進んだ。民族的な分類概念である“明郷（ミンフォン/Minh Huong、在地化した中国系移民）”についても、集団のもつ凝集性の性格理解が深まった。

【写真３】

文書資料も、バオヴィンの地簿関係資料や地籍図や15世紀に村の始まりが遡ることを傍証する開耕氏族の家譜、中国からの移民を祖先とする明郷一族の家譜資料（**写真４**）などが新出したが、これらはヴェトナム史研究においても非常に貴重な存在となろう。また、家譜資料の増加によって、各氏族の歴史的深度がかなり具体的に理解できるようになり、集落の共同体形成過程に関しておおよその時間的定点を与えることが可能になってきたことは大きな成果である。

【写真４】

本年度は、前半期授業のなかで、彦根市八坂集落で本調査前の事前実地調査授業（10ページ合宿参加記参照）を行ったこともあり、実地調査において戸惑う学生も少なく、独立した各班の調査内容が最終的には相互連関性をもつという総合野外調査の意義など、本プロジェクトの最終目標への理解度も高く、フィールド調査入門としては満足のいくものとなった。

現在、後期授業の中で調査資料を整理中であり、年度末に補完調査を行った後、２年間の調査結果に基づくシンポジウム、そしてモノグラフ印刷による成果公表を来年度に予定している。

写真１：秋祭の日、大雨でフオン河がたちまち増水し、バオヴィンの表通りに水があふれかえったが、人々は平然と日常生活、さらには村の祭礼を行っていた。
写真２：バオヴィンの裏通りにある螺鈿細工屋、貝殻はホイアン（Hoi An/会安）より仕入れている。
写真３：バオヴィンの川縁にたつフランス時代の方角住居。現在居住の家族は、夫は絵描きと彫刻をし、妻は土器などの日常生活雑貨を商っている。
写真４：ミンフォンの一族がもつ家譜の一部。先祖は福建省厦門出身で、当主は洪秀全との血縁関係を言明していたが…。

ヴェトナム・フエ都城周辺集落の伝統民間文書とその文化的脈絡の包括的収集と保存・プロジェクト

代表の吾妻重二教授をはじめとする本拠点のメンバーが中心となり、トヨタ財団「アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」プログラムの助成を受け、フエ都城周辺の集落に保管される文書類を包括的に収集・保存するプロジェクトが開始された。

フエ周辺の各集落は、北部や南部に比べ、封建王朝時代からの伝統的文化・慣習が非常に身近である場合が多い。特に17世紀以降の地方文書類がまとまって保管されている各文書群はその粋ともいえるものである。未だそれらを包括的に集成かつ研究した例はない。当然媒体は紙であるから、不慮の事故があればそれらは灰燼に帰してしまうわけで、何らかの半永久的保存措置が待たれて久しかった。また、本拠点にとってフエは研究の新天地でもあるため、旧外港集落（前出）での研究活動と併せて、学術資産あるいは地元との共同活動経験を蓄積し、あらゆる意味での次世代への経験・資産委譲を究極目標としている。

第１次調査は３月下旬にフエ市のドゥックビュー（Duc Buu/徳郵）、海岸部フーヴァン県（Phu Vang/富栄）のミーロイ（My Loi/美利）とハータイン社（Ha Thanh/河清）の各集落で行い、第２次調査は５月にフオンチャー（Huong Tra/香茶）県クワンタイン（Quang Thanh/広城）社の各伝統集落で行った。

調査では、単に文書を収集するのではなく、文書を保管している組織や人たちの実態や慣習（**写真５**）、さらには保管場所における文書群のあり方の違いなどに理解が進むよう配慮したのも一つの特徴である。こうした包括的収集調査は日本で発達したもので（最近例：滋賀県日野町）、ヴェトナムにおける地方文書資料収集の新しいスタイルである。

第１次調査はディン（Dinh/亭）などに保管されている集落の公文書類の収集に主眼を置いたもので、徴兵のための人丁を記載した丁簿（**写真６**）、集落間の土地争いや土地の売買を記した土地関係の契約書類、地籍簿、ディンなどの村の宗教施設での祭文や財産目録、朝廷側が村に出した勅令（**写真７**）や宗教施設（ディン、廟など）への公認状（勅封状）、さらには村の地図（**写真８**）など多種にわたる。

【写真５】

また、クワンタイン社では、各氏族の祖先を祀る祠堂を中心に収集活動を行い、集落共同施設に残る集落共有の文書群との違いが理解できるようにした。各祠堂では家譜（族譜）が文書の主を占め、若干の地簿登記表や土地売買などを表す財産関係文書が混じる場合が一般的である。

前出のハータイン社では、阮朝期の村組織の役職として確認可能な、“守簿”という村の文書管理役がいまだに村の長老会（各氏族の代表者達）に存在し、文書箱は彼の家の祭壇で厳格に保管されていた。当然、文書箱を開陳する際と再び封印する場合には正式な祭祀を行わなければならない。また、集落によっては漢文文書自体が1960年代まで作成されており、それらを読解できる人がまだご存命であった。漢文教育が放棄されて久しい現代において素直な驚きであった。

【写真６】

【写真７】

本プロジェクトでは、最終的には１万葉を軽く越える伝統地方文書の収集が予想される。当然これら全てを出版などで公開するのは不可能である。しかし、近年急速な進歩を遂げたデジタル・アーカイブ型式なら、十分対応可能な量であり、公開にこぎ着ければ、ヴェトナム研究における巨大な学術資産が出現することになる。

【写真８】

写真５：ハータイン村では、村の文書を保管・管理する役職（守簿）が、文書箱を開封する前に、祭礼を行わないといけない。
写真６：景興62（1801）年編纂の丁簿（徴兵のための基礎台帳）。黎朝の景興年号は正式には47（1786）年までしかなく、1801年は阮朝創始の１年前にあたる。しかし、フエ郊外のドゥックビュー村では、黎朝を倒した西山朝の年号を使わず、旧王朝年号を使っていたことを示す貴重な文書。
写真７：永祐4（1738）年に発行された、河清（ハータイン）社への河川通行などにともなう税金免除の公認状。
写真８：ミーロイ村の阮朝時代の地図。海岸部の砂丘に位置し、海岸とラグーンに挟まれた地形がよく表現されている。

活動報告（1）：ICIS 共催シンポジウム等

ICIS共催シンポジウム　国際シンポジウム

＊東アジアの文化遺産―その普遍性と独自性―

2009年５月９日・10日、米国・ニューヨーク州のバーナード学院を会場として、ICISとバーナード学院アジア中近東文化学部、コロンビア大学東アジア言語文化学部の共催による国際シンポジウム「東アジアの文化遺産―その普遍性と独自性―」が行われた。その目的は、東アジア諸民族が長い年月の交流を通して蓄積してきた共同の文化遺産を、「普遍性」と「独自性」に着眼し、立体的、学際的に検討するというものである。基調講演４名、発表者14名、パネルディスカッション５名に加え、日本、米国、中国、台湾、韓国、カナダ、イタリア、英国など各国・地域の東アジア研究者が結集した。拠点サブリーダーの内田慶市教授がICISを代表して挨拶をした他、沈国威教授が基調講演「異文化受容における漢字の射程―蘭学者とプロテスタント宣教師からの新叡智―」を行い、増田周子教授は「日本近現代文学に描かれた東アジア」と題して、火野葦平と中国古典文学について発表した。またパネルディスカッションにおいて、野間晴雄教授は「周縁アプローチからみたフエ」、熊野建教授は「イフガオにおけるユネスコ世界遺産」と題する報告を行い、議論に参加した。野間教授の報告は、ICISが特に力を入れているヴェトナム・フエでの周縁プロジェクト研究の成果報告である。会場には約60名から80名の参加者があり、東アジアの文化交渉についての議論を深めたことで、国際的な学術ネットワーク構築に向けて一歩前進したと言えよう。

＊ International Convention for Asian Scholars 6

2009年８月６日～９日、韓国・大田のコンベンションセンターにおいてInternational Convention for Asian Scholars（ICAS）6が開催され、ICISも「周縁アプローチの可能性」と題する機関パネルを通じて参加した。ICASは英語によるアジア研究のための大規模な国際学会であり、今回も1,000人を越える参加者により、多岐にわたるパネルセッションが設けられて、幅広い議論が展開された。

ICISの機関パネルは小田淑子教授を司会とし、８月８日に行われた。報告者として、拠点サブリーダーの藤田高夫教授、岡本弘道COE-PDに加え、同志社女子大学の大西秀之准教授、大阪大学の木村自助教を招き、限られた時間の中で密度の濃い議論が行われた。議論の中では、「周縁」の持つ多義性と、それぞれの「周縁」が抱く「中心」のイメージの多様性、ディシプリンを越えた研究の可能性などが確認された。

報告タイトルの日本語訳は以下の通りである。なお言うまでもなく、各報告及び質疑応答は全て英語により行われた。

・藤田高夫
「漢代の河西――周縁たることを自ら選択した事例」
・岡本弘道
「琉球王国の国際的位置――外交戦略としての周縁性」
・大西秀之
「近代日本の政治・経済的影響による
アイヌの生計戦略の変容」
・木村自
「中国･ミャンマー国境地域における戦略としての周縁性
――ポストコロニアル・ミャンマーにおける
雲南ムスリム移民の事例から」

関西大学文化交渉学教育研究拠点とフエ科学大学歴史学部共催によるシンポジウム

＊フエの文化と歴史―周辺集落と外部との関係からの視点より―

ヴェトナムの研究者との議論・交流を通じて、本拠点のヴェトナム・フエ研究をより豊かなものとするため、フエ科学大学歴史学部との共催シンポジウムを９月５日・６日にフエ科学大学にて開催した。

フエの歴史や文化事象に関して、本拠点が研究している外港集落や地方文書が多く保管されている都城周辺集落、さらにはフエの外部との関係や阮朝以前のフエ地域史などから考察することをテーマとした。本拠点からは野間晴雄教授がフエ都城と滋賀県彦根市の歴史地理学的比較研究、COE-RAのグエン・ティー・ハータイン氏がフエ外港集落で収集した地籍関係資料の分析、西村昌也COE助教がフエ北郊に位置するチャンパ時代から陳朝期にまたがるホアチャウ（Hoa Chau/化州）城郭遺跡について、それぞれ報告を行った。また末成道男氏（元東京大学教授）や木村自氏（大阪大学）がミンフォンの信仰や祖先祭祀、大西和彦氏が九天玄女信仰、林英昭氏（早稲田大学理工学部）がフエの建築に関する地域性と形成過程に関する研究発表をそれぞれ行った。ヴェトナム側からはフエ科学大学歴史学部、フエ古都遺跡保存研究センター、文化芸術研究院フエ分院などの研究者が報告を行った。

実地調査の合間に開催されたシンポジウムゆえ、準備時間や論文の翻訳に関して多少のとまどいも生じたが、会議自体は100人近い出席者があり、実質的な研究に主眼を置いた内容の濃い発表が多かったとの評価を頂いた。各報告は本年度中にヴェトナム語で会議紀要が印刷され、日本語訳論文もICISより来年度刊行する予定である。

国際シンポジウム

＊東アジア文化交流――学術論争の止揚をめざして

2009年９月19日・20日に中国杭州市で、関西大学文化交渉学教育研究拠点と浙江工商大学日本文化研究所の共催による国際シンポジウム「東アジア文化交流――学術論争の止揚をめざして」が開催された。日本及び中国から100余名の研究者が参加し、活発な議論が展開された。

この国際シンポジウムに、ICISから９人のメンバーが参加した。藤田高夫教授が「東アジアの共時性」というタイトルで基調講演を行ったのを皮切りに、分科会では、松浦章教授が「清代帆船が日本にもたらした鴉片戦争情報」、増田周子教授は「日中におけるプロレタリア文学の評価をめぐって」と題して報告を行った。また、COE-RAの熊野弘子氏は「江戸時代の和刻本・注釈本を通して見た中国医学の日中交流」、宮嶋純子氏は「漢訳仏典中の訳語受容にみる日中比較」、董科氏は「平安朝以前における疫病の成因論考」、鄭潔西氏は「万暦二十年代明朝・朝鮮に伝入した豊臣秀吉の死亡情報」、田中梓都美氏は「明治初期の台湾における日本人研究者の活躍」、馮赫陽氏は「清朝における日本蒔絵の受容」という題目で、それぞれ報告を行った。

今回の国際シンポジウムは若手研究者に広く門戸を開き、言語や年齢、役職を超えて、意欲ある者が共通の問題意識の下、それぞれのテーマに即して意見を交わすことができたという意味で、非常に有意義な機会となった。

＊拠点教育状況

＊第13回日本アジア学会（ASCJ）

2009年６月20日・21日に東京の上智大学四谷キャンパスにおいて、第13回日本アジア学会（The Asian Studies Conference Japan; ASCJ）が開催された。関西大学ICISリーダーの陶徳民教授をはじめ、本拠点のリサーチ・アシスタント（RA）１名及びジュニア・アシスタント（JA）５名が発表者として参加した。

ASCJはアジア学会（Association for Asian Studies; AAS）に所属する大型年次学会であり、日本で行われる定期的な英語の学会として最大規模の、社会科学・人文科学の学会である。二日間にわたり、主にアメリカと日本からの研究者諸氏が英語により、日本及びアジア諸国に関する研究結果を発表した。本拠点の発表者は「19世紀末20世紀初期における東亜への視角」と「19世紀末20世紀初期における東亜社会の変化」というテーマにより二つのパネルに分けられ、各自の研究成果を発表し、議論を行った。また発表以外の時間は他のパネルの討論にも参加し、ハーバード大学、東京大学を含め各大学の研究者諸氏と学術的な意見を交換した。

他の大学からの発表者は教授、PDの方が多かったことに対し、本拠点の発表者は主に博士前期課程の学生であり、最年少の若手研究者として参加することができた。研究業績の優れた研究者諸氏と議論することは若手にとって貴重な機会である。今回の学会発表を通じて、日本及びアジアに関する最新の研究情報を得ることと共に、若手研究者の英語能力や口頭発表能力を向上させることもできた。

（担当：徐暁純・M2）

＊周縁プロジェクト合宿授業・彦根荘

2009年７月12日から１泊２日の日程で、我々文化交渉学専攻の大学院生を中心に、関西大学セミナーハウス彦根荘で合宿授業を行った。これは関西大学G-COEプログラムにおける周縁プロジェクトの一環であり、９月に実施されたフエでのフィールドワーク調査に向けての事前準備・トレーニングも兼ねている。

初日、彦根荘に到着し、先生たちから簡単な説明を受けた後、我々学生は早速、八坂町を調査する旨が伝えられた。我々学生は、与えられた八坂町の地図にもとづき、歴史・地理・文化的事象に主眼を置いた実地調査を、それぞれ個人の裁量で行った。未知の場所で、予定外の調査を行うことは、本番のフエでのフィールド調査の状況を想定してのことである。

私は修士課程では日本近世史を専攻しており、古文書調査以外の現地調査は今回が初めてだった。だが、渡された地図をみて、漠然と「琵琶湖と八坂町の人々との関わり」を調査したいと思った。日本一大きな琵琶湖のそばで暮らす人たちが、琵琶湖を無視して生活できるはずがない。

そこで、ぶっつけ本番で調査を開始したが、始めの２・３人は聞きとりの要領を得ず、こちらの意図を十分に伝えることができなかった。だが、聞き取りを行ううちに、漠然としたテーマ設定でむやみに調査を行うのではなく調査項目を細かく設定し、その上で聞き取り調査を行う必要性を感じとった。

当日は炎天下で、終日汗を流しながらの調査となったが、八坂町は湖岸道路が出来る前と後で、その生活スタイルが大幅に変わったということが最終的に理解できた。また、調査後に報告会を行ったが、各人の興味対象が違えば、聞き取れる内容も千差万別に及ぶ。個々の視点を組み合わせることにより、結果として八坂町のことをより多面的に把握できることを実感した。

４月から文化交渉学という新たな専攻に所属することとなった我々にとって、それぞれ別個の研究テーマを抱える関係上、同じ場を共有して共同研究を行う機会を確保するのは容易なことではない。だが、この合宿をきっかけに、全員の距離が良い意味で縮まったように感じた。また、先生をはじめ、先輩方の研究手法を間近で見ることができたのも非常に良い経験となった。

来年、調査に赴く学生にも、調査前に、是非このような有意義な機会を活用して欲しいと願う。

（担当：田中梓都美・D1）

第四回

ご先祖さまの食事

松井　真希子（文化交渉学教育研究拠点・RA）

「食」とは必ずしも生きる者にのみ関わるものではない。生者は死者、とくに自身の祖先にしばしば食べ物を供える。その最たる例が祖先祭祀である。

儒教の家庭儀礼の典型として南宋・朱熹（1130-1200）の『家礼』がある。当時の死者儀礼はおおむね仏教式で行われ、しかも煩瑣なものが多かった。これを憂慮した朱熹は、簡素で庶民も実践できるような儒教儀礼書として『家礼』を記した。この『家礼』には祖先祭祀に用いられる供物について「野菜・果物・酒・ごちそうを用意する」（蔬・果・酒・饌を設く）とある。その配置を図示した「毎位設饌之図」にはより具体的に記されている。

【『家礼』「毎位設饌之図」（須原屋茂兵衛刊和刻本、1792年）】

日本では儒学に傾倒した徳川光圀（1628-1700）が父の葬礼と祭礼を儒教にのっとってとり行った。その際には朱熹『家礼』も参照され、その影響は廟祭、墓祭の期日や方式、祝文の形式などに顕著に表れている。ただし「食」に関しては様相が異なる。光圀の伝記・逸話集である『桃源遺事』には、光圀の意見として、儒教儀礼にのっとるとしても酒や肉を用いず、茶や菓子を供えるべきだとある。事実光圀は年忌や忌月などの食事は菜食であったという。このように、日本では儒教の影響を受けつつも当時の日本社会の時勢や風習に応じて独自の展開を見せているのである。

ところで、日本では朝・昼・晩と、生者と同様に死者に食事を供えることがある。筆者の祖母宅でも毎日祖先に食事を供える。祖先に食事を用意することは、祭祀でのみ行われる特別な行為ではなく、日常的な行為として生活に浸透している。

祖先に日常的に食事を出すのは日本だけではない。筆者は2009年にヴェトナムで祠堂を調査したが、そこには簡単な食事が供えられていた。それは祭祀というにはあまりに質素で、むしろ日常的な食事を供えているようであった。これは筆者の祖母宅で日々の食事を供えるのとまったく同じ行為ではないか。

朱熹は伝統的儒教儀礼が実践困難であることを痛感していた。煩瑣な形式にとらわれず、簡単でも愛情のこもった儀礼を多くの人に実践してほしいと望んだに違いない。そのために、より簡素で実用的な『家礼』を記すことで、儒教儀礼を庶民にまで浸透させようとしたのではないか。そしてそれは祖先祭祀についてもいえるはずである。

江戸時代、儒教の影響を受けつつも光圀が供物に日本の慣習を反映させ、祭祀にあたり自ら菜食を実践したのは、祖先への敬意を体現したかったためだろう。そして現在、日本やヴェトナムなどで多くの人が祖先に対して簡単でも日常的に食事を供える行為もまた、祖先に対する敬意や愛情の表れであり、朱熹や光圀のそれと何ら変わるところはない。「ご先祖さまの食事」を通して見うけられる祖先に対する敬愛の念は、時空を超えた普遍的な感情なのかもしれない。

【ヴェトナム・祠堂の供物】

活動報告（2）

《　創生部会　》

2009年５月から10月末日までに開催された創生部会は下記の通りである。

第20回創生部会：2009年５月29日

ニコラ・ディ・コスモ（プリンストン高等研究所教授）

「比較文化的観点からみた満洲の「正当なる戦い」の観念」

ディ・コスモ氏は戦争を大規模な異文化接触行為として捉え、「正当なる戦い」（just war）の成立について報告を行った。「戦争発動の権限と理由」（ius ad bellum）と「適切な戦闘行為」（ius in bello）は戦争を正当化する二つの重要な要件であり、インド、ヨーロッパ、中国の各地でその原型が見られる。次に、ヌルハチ時代の女真族を例として、彼らの開戦理由について詳しく分析した。最後に、マルティーノ・マルティニが『韃靼戦紀』の中にもその開戦の理由を取り入れ、清朝の正当性を裏付けたことが示された。

木村昌人（渋沢栄一記念財団研究部長）

「渋沢栄一と渡米実業団【1909年】再考―100周年を迎えるにあたって」

本報告では、とかく政治面や文化面から語られがちな日露戦争後の国際関係を、日米における実業家の交流を切り口として考察がなされた。1909年、日米通商条約改定をにらみ、中国市場でアメリカと平和裏に競争するため、渋沢栄一を代表とする実業団が渡米した。これは明治初期に渡米した岩倉使節団に匹敵するほどの重要性を秘めており、結果、日米の経済人交流を促進する役割を果たした。また、訪問先に文化施設を加え、実業家の社会貢献やアメリカ社会のパワーをも学んだ点が注目できる。

第21回創生部会：2009年７月１日

黄俊傑（COE客員教授）

「朱子「理一分殊」説および21世紀のグローバル化時代におけるその新意義」

本報告では、朱子「理一分殊」説の概念および21世紀のグローバル化時代に直面する「理一分殊」説の新たな意義と挑戦について検討がなされた。朱子「理一分殊」説における「理一」と「分殊」の二つの概念は対抗する関係ではない。「理一」とは「分殊」という概念に含まれているが、しかし普遍にして抽象的な「理一」は特殊にして具体的な「分殊」から抽出され、それを凌駕するものである。21世紀における抽象性を帯びたグローバル化（＝「理一」）は、必ず具体性を帯びた各国間の関係（＝「分殊」）に基づいた上で成立し、時代を伴って発展すべきものであると朱子の「理一分殊」説は啓示している。

第22回創生部会：2009年７月22日

馬德斌（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス経済史学部講師）

「近世中国の法律と経済の変遷：イギリス・ヨーロッパとの比較」

本報告では、中国の伝統的な法律制度と商業活動の関係から、カリフォルニア学派の「大いなる逸脱」学説を

再検討した。カリフォルニア学派は、18世紀末までは中国江南地域の経済発展段階や生活水準が西ヨーロッパの中核地域のそれと遜色がなかったとする。しかし19世紀になると、江南地域では石炭不足の制約から産業革命に至らなかったのに対し、西ヨーロッパでは新大陸資源の吸収により近代化が興ったと主張し、大きな反響を呼んだ。馬氏は、前近代における中国とヨーロッパの法律制度の差異から、滋賀秀三・寺田浩明・黄宗智各氏の研究を比較し、「情」と「理」を特徴とする中国法律制度と商業の発展の関係を分析した。また、「大いなる逸脱」を考察する際、東西法律制度と近代化のつながりに注目すべきであることを指摘した。

第23回創生部会：2009年９月25日

藤田明良（天理大学国際文化学部教授）

「日本近世における古媽祖像と船玉神の信仰」

日本各地の媽祖信仰がどのように伝播し、受容されたのかについて、多くの写真資料を提示しつつ、報告がなされた。16世紀以降、多くの華僑が九州・西日本を中心に渡来し、唐人町が形成される過程で媽祖信仰が日本に入ってきた。そして江戸時代になると船玉神へと変化し、ローカル化していく。その背景には、全国市場形成に伴う海上交通の発展により、船乗りたちがより高い霊験を持つ海神を希求するようになっていったことがある。しかし、江戸時代末期になると、国粋主義の高揚により、媽祖を船玉神とする信仰は次第に姿を消していった。

顧鈞（北京外国語大学中国海外漢学研究中心准教授・ICIS 訪問研究員）

「サミュエル・ウィリアムス —アメリカ初の漢学教授」

米国初の漢学者サミュエル・ウィリアムス（Samuel Williams/衛三畏）教授について報告が行われた。まず、「衛三畏」という中国語の名前の由来について、その中国語の発音が英語の原音に似ていること、そして『論語』季氏の「子日、君子有三畏。畏天命、畏大人、畏聖人之言」に典拠を持つことが説明された。次に、ウィリアムスが日本語を習得したことや日本に関する研究をしたこと、また、40年以上中国で生活し、漢学研究の専著を執筆したため、エール大学初代の漢学教授に任命されたことなどが言及された。また、その後のエール大学の漢学研究の構築と発展について紹介がなされた。

第24回創生部会：2009年10月30日

西村昌也（COE助教）

「文化交渉学のためのフィールド調査とは？ —２年間のフエ調査を振り返って」

「周縁プロジェクト」の一環として昨年度より２年間にわたりヴェトナム・フエ市にて行われたフィールド調査に関する報告が行われた。本報告では、２年間の調査成果報告および今後の活動計画に加え、文化交渉学研究におけるフィールド調査の重要性、本調査が企画運営された過程、実際の調査を通じて浮き彫りとなったフィールド調査を行う上での課題などにも言及がなされ、文化交渉学にとってのフィールド調査のあるべき姿を再考する機会となった。

❖ 出版物紹介

＊松浦章／著
『海外情報からみる東アジア—唐船風説書の世界』
（大阪・清文堂出版・2009年７月・492頁）

＊松浦章・卞鳳奎／編著
『明代東亞海域海盗史料彙編』
（台北・楽学書局・2009年10月・165頁）（中国語）

❖ 人事異動

2009年９月20日を以て、宮嶋純子氏がCOE-RAを退任した。
2009年10月１日を以て、王海氏、王彩芹氏、王鑫氏がCOE-RAに着任した。
2009年11月１日から2009年12月31日まで、馮錦栄氏（中国香港大学Honorary Associate Professor）をCOE客員教授として招聘した。
2009年11月１日から2010年１月31日まで、呉震氏（中国復旦大学教授）をCOE客員教授として招聘した。

《　海外活動報告　》
（2009年５月から2009年10月）

海外学会発表

陶徳民（ICISリーダー）
○2009年７月４日、オックスフォード大学国際研究集会「The Global Lincoln」における研究発表。

内田慶市（ICISサブリーダー）
○2009年５月29日、エトヴェシュ・ロラーンド大学（ハンガリー）国際シンポジウムにおける研究発表。
○2009年９月１日、オスロ大学でのワークショップ「近代東西言語文化交流の史実と影響」における研究報告。

松浦章（ICIS事業推進担当者）
○2009年５月23日、静宜大学での2009日本学與台湾学国際学術検討会における招待発表。
○2009年８月28日、貴州師範大学での第三届中国近代社会史国際学術研討会“近代中国的社会流動、社会控制與文化伝搬”における研究発表。

小田淑子（ICIS事業推進担当者）
○2009年９月25日、チャナッカレ３月18日大学（トルコ）での国際シンポジウム「日本人研究者たちが見たトルコ」における研究発表。

原田正俊（ICIS事業推進担当者）
○2009年６月２日、ライデン大学での国際研究集会「近世日本における宗教と儀礼へのまなざし」における研究発表。

沈国威（ICIS事業推進担当者）
○2009年５月28日、エトヴェシュ・ロラーンド大学（ハンガリー）国際シンポジウムにおける研究発表。
○2009年６月23日、広東外語外貿大学での第１回中国翻訳史研究サマーセミナーにおける招待基調講演。
○2009年９月１日、オスロ大学でのワークショップ「近代東西言語文化交流の史実と影響」における研究報告。

海外調査・その他

陶徳民（ICISリーダー）
○2009年８月７日～９月６日、台湾大学人文社会高等研究院における学術交流協定締結、及び東アジア文化交渉学会2010年度大会にむけての打合せ、準備。
○2009年９月18日～９月23日、復旦大学・上海社会科学院における国際シンポジウムの打合せ、及び資料収集。

増田周子（ICIS事業推進担当者）
○2009年8月16日～8月23日、台湾国家図書館／台湾文学館／台湾資料館における、台湾の日本語文学資料調査。

二階堂善弘（ICIS事業推進担当者）
○2009年８月12日～８月19日、中国福建省北部における寺廟調査。

西村昌也（COE助教）
○2009年６月15日～６月23日、タイにおけるヴェトナム系移民の物質文化調査。

篠原啓方（COE特別研究員）
○2009年７月24日～８月11日、韓国における碑石・遺跡の現地調査、及び高麗大学校韓国史学科中国（西安・敦煌）踏査に参加。

孫青（COE-PD）
○2009年５月24日～６月3日、上海図書館／杭州档案館における資料調査。
○2009年８月10日～８月29日、上海図書館／広州図書館における資料調査。

王頂倨（COE-RA）
○2009年8月16日～9月2日、台湾国家図書館／台湾文学館／台湾資料館等における資料調査、及び研究者訪問。

鄭潔西（日本学術振興会特別研究員（グローバルCOE））
○2009年９月23日～10月22日、高麗大学校日本研究センターにおける豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争に関する史料調査、及び実地調査。

田中梓都美（COE-RA）
○2009年７月28日～８月７日、台湾大学伊能文庫等における資料調査。

なお、以下の行事にかかわる研究報告・調査については当該の紹介記事を参照されたい。
（**ゴシック**は研究報告を行ったメンバー）

（１）国際シンポジウム「東アジアの文化遺産」（p.8）：内田慶市（ICISサブリーダー）・**沈国威・熊野健・野間晴雄・増田周子**（以上、ICIS事業推進担当者）

（２）International Convention of Asia Scholars 6の機関パネル（p.8）：**藤田高夫**（ICISサブリーダー）・小田淑子（ICIS事業推進担当者）・**岡本弘道**（COE-PD）

（３）平成21年度フエ・フィールドワーク実習（pp.6-7）／フエ科学大学歴史学部との共催シンポジウム（p.9）：**松浦章**・二階堂善弘・**野間晴雄**・熊野建（以上、ICIS事業推進担当者）・**西村昌也**（COE助教）・篠原啓方・井上充幸（以上、COE特別研究員）・岡本弘道・黄蘊・孫青（以上、COE-PD）・**Nguyen Thi Ha Thanh**・三宅美穂・稲垣智恵・海暁芳・川端歩・田中梓都美・董科・馮赫陽・松井真希子（以上、COE-RA）・伊藤瞳・鄭英實・陳其松（以上、文化交渉学専攻M2）

（４）国際シンポジウム「東アジア文化交流」（p.9）：**藤田高夫**（ICISサブリーダー）・**松浦章・増田周子**（ICIS事業推進担当者）・**宮嶋純子・熊野弘子・田中梓都美・董科・馮赫陽**（以上、COE-RA）

グローバルCOEプログラム
「関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）」

紀要原稿募集のお知らせ

関西大学文化交渉学教育研究拠点では、紀要『東アジア文化交渉研究』（Journal of East Asian Cultural Interaction Studies）の原稿を、下記の要領で募集しております。応募いただいた原稿は、編集委員の査読により、掲載の可否を決定いたします。

（1）原稿
東アジアの文化交渉にかかわる論考、研究ノート、その他

（2）使用言語
日本語：20,000字程度
中国語：12,000字程度
英　語：4,000語程度

（3）注意事項
（a）英語による要旨を、150語程度で添付してください。
（b）提出はワード文書でお願いいたします。
（c）注は脚注方式でお願いいたします。
（d）文献についても参照文献リストは付けず、脚注に収めてください。
（e）図表がある場合にも、なるべく上記字数に収めてください。

（4）投稿原稿の二次利用としての電子化・公開につきましては、紀要掲載時点で執筆者が本拠点に許諾したものといたします。

（5）提出締切り等、詳しくは下記の連絡先にお問い合わせください。

〒564－8680　大阪府吹田市山手町3－3－35
関西大学文化交渉学教育研究拠点
『東アジア文化交渉研究』編集委員会
TEL : 06-6368-0256
E-Mail : icis@ml.kandai.jp

編集後記

「発信力」とは、何か。

周知のように、ICISの人材養成プログラムはその特色の筆頭に「多言語による発信力を持つ若手研究者の養成」を掲げている。前号のRA対談でも取り上げた、専門的な語学授業がカリキュラムに含まれるのもそれ故である。本号の個別の記事を見ても、教員から院生まで様々な場において「発信」の実践を積み重ねている。それらはもちろん重要なことである。

しかし、「発信」そのものに意味を持たせることまで含めて「発信力」と呼ぶならば、それだけではまだ足りないのではないか。一つは「発信」自体に内在する「受け手」の存在。そしてもう一つは発信される内容自体の「切実さ」。個々の研究の価値は決して一義的に決められない。だが、それを伝えずにはいられない「切実さ」の高低は、確実にその価値評価に跳ね返る。「切実さ」を高めるために、どれだけその内容を突き詰めることができるか。そのために、個々の研究者がどれだけ「面白がる」ことができるか。“学問の危機”に立ち向かうには、正攻法しかない。　（担当：岡本弘道）

表紙写真について

ここはガンジス沿いの町バラナシ――ヒンドゥー教・仏教両方の聖地である。

バラナシのガンジス近くで死んだ者は輪廻から解脱できるといわれ、ガンジスの岸辺に火葬場も設けられている。死者の死体はそこで焼かれ、その遺灰はガンジスに流されるのだ。

バラナシのガンジス河岸に夜明けから巡礼者が集まる。そこで沐浴し、祈りを捧げる人々は変わらない一つの風景をなしている。河岸にいくつか連なるヒンドゥー寺院の中には、朝から信者がひしめき、何かの行事を始めようとしていた。夜が徐々に明けていくにつれ、河岸の人が増え、ガンジスの一日は本格的に始まろうとしていた。

「ここからは写真禁止だ」と、船を漕いでくれるヒンディーのおじさんからいきなりそんな言葉を浴びせられた。われわれの船が通過した河岸で死体が焼かれている最中だった。その近くに木が積まれていて、煙りが一面に立ち込めていた。

11月の下旬に入った町の中に木の葉を焼く人はあちこちで見かけられる。牛たちも大通りを闊歩している。時は21世紀に入っても、インドの人々は昔ながらの生活スタイルを維持しようとしている。聖と俗が渾然一体となっているのは聖地バラナシ特有の風景なのだろうか。

［撮影：黄蘊］

Reflection 5

ICIS Newsletter, Kansai University

発行日：2010年（平成22年）1月31日
発　行：関西大学文化交渉学教育研究拠点
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680／TEL06-6368-0256
E-Mail icis@ml.kandai.jp／URL http://www.icis.kansai-u.ac.jp/

関西大学文化交渉学教育研究拠点